個人の市場価値の向上と生涯成長を支える

NEWS LETTER

EAT
Education for Asian Talents

株式会社人財アジア 定期ニュースレター

vol.47

2026 年 09 月

☐ 岡村の最近の注目ニュース　☐ ビジネス予備校近況リポート　☐ B-EAT 会活動報告　☐ What's up?

人生 150 年時代？ 早く守りに入ってはもったいない！ 広い世界を満喫していきましょう

2026/09

仕事で色々な年齢層の方に出会うが、世間的には定年の私よりも 20 歳は若い方々から、もう相応の年齢だから新しい分野には行かない、と聞かされ不思議な気持ちになる。昨今流行りのジョブ型雇用が現状にとどまる圧力をかけている。早期に挑戦を控え、自分の関心を狭めることは、激変の時代を生きる個人にも企業にも、マイナスではないのか。

私的生活での関心も狭まる傾向にある。

あなたは、自分の関心事を調べる Google 検索派か、世間の関心事を眺める Yahoo! ニュース派か？大学生に聞いたらほぼ全員が検索派だった。スマホや PC のデフォルト設定で無意識に使っていたらしい。広い世界に目を向ける日常的な習慣作りを応援している。企業人も、〇〇を知りたい、XX を教えてほしいという検索的思考癖が目立つ。人との交流も社内、自部門に閉じる傾向にあり、外界との接点が狭くなるばかりだ。

自身の興味関心だけで生きる弊害はなんだろうか？
世間を知らないと、思考が一面的かつ表面的になってしまうのではないか。
先日 Yahoo! ニュースで板野友美さんの宿泊ホテル内撮影トラブルを目にした。脱衣所の様子のアップが炎上している。板野さんはホテルに事前に了解を得たと言う。ホテル側は、脱衣所まで OK を出していない、常識で考えてほしいとのニュアンスだったか。頭が刺激され、考え事が始まる。

突然に米国の金融業界が思い起こされた。ノーと決められていない限りイエスがルールの世界。だから各社鎬を削ってギリギリの線まで攻める。日本では、ノーと明記されずとも“常識”で考えてグレイなら罰する風潮が残っている。イノベーションに慎重なマインドになるのは自然な流れだ。

板野さんのニュースが日米文化の差異、さらには自分の専門分野の金融の強弱にまで膨らんでいく。日常を違った角度から考えるきっかけになった。答えは一つではないのだとあらためて思う。コーヒーを飲みながら、そんな連想ゲームを楽しむことが多い。

冒頭に記したキャリア開発にも連想が広がる。
異動したほうがよいかどうか？正直どちらでも良い。

「成長に大事なのは働く場でなく、働き方だ。」

長らく異動せずとも、外界との接点を絶やさず、自身の専門性の価値を相対的にレビューしながら深掘りし続けるストイックな努力家もいる。“真の”ジョブ型雇用とは本来そういうものだろう。
一方で、私のように生来閉じた世界にこもりやすい人、飽きっぽい人も、少なくないはずだ。そういう人には、異動で自分を外界に晒し刺激することをススメたい。自分の可能性の追求を早く諦めてしまうと、若くして枯れてしまう。人生 100 年時代。ワクワクする時間が長いほど楽しくないか？

副次的な話だが、一つの仕事だけを続けると思わぬ失職リスクがある。2000 年、ユーロ通貨統合と為替売買の電子化が相まって、花形だった為替ディーラー業務は急速に縮小した。ストイックな努力家は自身の専門性を転用して転身したが、自身の専門性の理解が緩く他に紐付けて展開できなかった人もいる。

みなさんは、最近専門外の人と出会っているか？どんな話をしたか？仕事以外の話が心に入らない人になっていないか？
Anthropic 社 CEO のダリオ・アモデイが「これから 5〜10 年以内に人間の寿命は 150 歳になるかもしれない」とコメントした。もしも AI に人類が滅ぼされなければ、あなたの将来は想像以上に長いかもしれない。広い世界へ想いを巡らせ思考を楽しんでいこう！
人間は考える葦である。“考える喜び”への原点回帰。

今回は東京一期生橋口さんが寄稿してくれた。じっくりと腰を据えて日本に外国人チーム・グローバル文化を作り、地に足をついた海外展開を遂行する姿勢からは学びが大きい。

注) この隔月ニュースの内容をさらに充実させ、発信していきたいです。メールアドレス等の変更は総務企画までお知らせくださいね！

（EAT 代表　岡村 進）

正解を探す仕事から、正解を作る仕事へ

朝日生命保険相互会社
海外事業部長

橋口 博行　氏

ベトナムでの保険会社買収・新会社立上げを通じて学んだこと

ベトナムでの保険会社買収プロジェクトに携わる中で、最近よく考えることがある。それは、「正解を探す仕事」と「正解を作る仕事」は全く違うということだ。

私は現在、ベトナムで生命保険会社の買収と新会社立上げに携わっている。保険会社の買収と聞くと、M&A、財務、法務、システムといった専門的な世界を思い浮かべる方が多いかもしれない。もちろん、それらはどれも重要である。しかし実際に現場に入ってみると、最も難しいのは専門知識ではなく、「何を意思決定すべきかを定義すること」だと感じている。

多くの仕事では問題が与えられ、その解き方を考える。ところが新会社立上げでは、そもそも問題設定自体が存在しない。何を売り、誰に売り、どのような組織を作るのか、何を優先し、何を捨てるのか。毎日が意思決定の連続であり、そのほとんどに正解は存在しない。

1. 部分最適の集合は「全体最適」にならない

プロジェクトが始まった頃、私は「優秀な専門家を集めれば良い意思決定ができる」と考えていた。しかし現実は違った。専門家は優秀であればあるほど自領域の最適解を提示する。税務、法務、IT、それぞれの正論はどれも正しいが、それだけでは経営判断にはならない。部分最適の集合が、必ずしも全体最適になるとは限らないからだ。

振り返ってみると、経営に求められているのは、専門家の意見を集めることではなく、異なるリスクや機会を同じ土俵に並べ、「何を優先し、何を受け入れるか」を決めることなのだと思う。

2. マネジメントの役割は「良い問い」を設定すること

この経験を通じて、私自身のマネジメント観も変わった。以前は「良い答えを持っている人」が優秀な管理職だと思っていた。しかし今は、「良い問いを設定できる人」こそが役割ではないかと考えている。

例えば「この案は税務上問題ないか」ではなく、「そのリスクは会社として受容可能か」と問う。「どちらが正しいか」ではなく、「何を優先すべきか」を考える。問いが変わると議論の質も変わる。答えそのものよりも、最初の「問いの立て方」こそが、その後の意思決定を大きく左右するのだ。

3. AI 時代に価値を増す「前提を疑う力」

EAT での学びを振り返ると、答えを急ぐのではなく、まず前提を疑い、自分は何を事実として見ているのかを考える習慣が身についたと思う。

AI は驚くほど速く答えを返してくれる時代になった。しかし、何を問うのか、何を大切にし、何を捨てるのか。それは依然として人間の仕事である。AI によって答えを得るコストが劇的に下がったからこそ、本質的な問いを立てる価値は以前にも増して高まっているのではないだろうか。

4. 50 歳を過ぎても、人は成長できる

ベトナムでのプロジェクトはまだ道半ばであり、成功するかどうかも分からない。しかし一つだけ確信したことがある。キャリアの後半、50 歳を過ぎてもなお、人は成長できるということだ。

若い頃は経験を積めば迷わなくなると思っていたが、実際は逆だった。経験を積むほど世の中に簡単な答えなど存在しないと分かる。だからこそ正解のない環境に身を置いた時、人は最も学ぶのだと思う。

EAT で学んだ価値は「答えを教わったこと」ではなく、「問い続ける習慣を身につけたこと」だった。正解を探す仕事から、正解を作る仕事へ。その移行こそが、私にとってのEAT の最大の学びだった。

What's up?

川瀬　綾音
Ayane Kawase
EAT ビジネス予備校
東京クラス（4 期生）

本業は物流関係なのですが、去年から絵本を中心に副業で翻訳も始めました。
4 月に出産して現在育休中なので、育児の傍ら、すきま時間で翻訳の仕事も続けております。自分が翻訳したものを作品として我が子に届けられるというところに、本業とはまた違ったやりがいを感じています。実は翻訳の仕事には 10 年以上前から興味があったものの、忙しいことを言い訳にして手を出せずにいました。「何十年後かに後悔したくない」と思って学び始めたのですが、今では、やってよかったなと心の底から思っています。

EAT 株式会社人財アジア
〒100-0005 東京都 千代田区丸の内 1-8-3 丸の内トラストタワー本館 20 階
［TEL］03-6300-6460　［Mail］info@eat-star.asia

特別寄稿および What' s up?　に掲載して下さる方を募集しています。ご希望の方は事務局までお問合わせのほど、お願い致します。